

桜あう 巒らん 春しゅん 容よう
林りん 鶴かく 梁りやう

香ハ 則チ 淡ナリ 矣。 姿シ 態シ 妖シ 冶ニシテ 韻ニシテ 致シ 瀟セウ 洒シヨタリ 又マタ 非アラスンバ 雪ユキ 華カ 柳リウ
絮シヨ 之ノ 可ベキニ 喻タトフ、 豈アヒ 非ザラン 桜サクラ 花ハナ 之ノ 逞タクマシク 春ハル 容ヨ 耶ヤ 都ト 人ヒト 往ユク 往ユク
賞スルハ 花ハナ 於コ 飛ア 鳥カ 墨スミ 陀ダニ 以ニテ 其ノ 多キヤ 花ハナ 也ヤ 而シテ 相アヒ 馬ウマ 氏シ 邸テ
内ハ 岡カウ 巒らん 疊じやう 連れんシ 挺てい 拔ばつンテ 而シテ 凸とつタリ 地ハ 清ク 趣ハ 幽ニシテ 境ト 与と 花ハナ 称かなフ
矣。 此これ 為たり 麻マ 溪けい 第ダイ 一イチ 勝シヨク 但タダ 視くツレバ 之ノ 飛ア 鳥カ 墨スミ 陀ダニ 花ハナ 数カズ
不ズ 能あたハ 望ムコト 半ハ 然しかレドモ 飛ア 鳥カ 墨スミ 陀ダニ 則チ 遊ユ 客キヤク 雜ザツ 遯たふシ 頗すこぶル 為ニリ 殺コロス
風フウ 景ケイ 独リ 此コノ 花ハナ 在リテ 幽ウ 清セイ 之ノ 境ニ 不ズ 為ナラ 点てん 塵ちんノ 所ト 汚けガス 乃すなはチ
其ノ 過はなはダ 絶スルコト 於コ 飛ア 鳥カ 墨スミ 陀ダニ 遠シ 矣。 豈ニ 啻たダニ 其ノ 冠ニタル 麻マ 溪ケイ 而シテ
已みなラン 哉や。

(鶴
梁
文
鈔)

【書き下し文】

漫たり斯れ雲かと疑ひ、而も色は則ち艶なり。翻たり斯れ鶯かと訝り、而も香は則ち淡なり。姿態妖冶にして韻致瀟洒たり。又雪華柳絮の喻ふべきに非ずんば、豈に桜花の春容を逞しくすること非ざらんや。都人往往にして花を飛鳥・墨陀に賞するは、其の花多きを以てなり。而して相馬氏の邸内は岡巒疊連し、挺拔して凸たり。地は清く趣は幽にして、境と花と称ふ。此れ麻溪第一の勝たり。但だ之を飛鳥・墨陀に視ぶれば花数の半ばを望むこと能はず。然れども飛鳥・墨陀は則ち遊客雜遝し、頗る殺風景たり。独り此の花のみ幽清の境に在りて、点塵の汚す所と為らず。乃ち其の過だ飛鳥・墨陀に絶すること遠し。豈に畜だに其の麻溪に冠たるのみならんや。

【口語訳】

(春、桜の花が)一面に広がっている様は雲ではないかと疑しく思う(ほどだ)が、その色は華やかでなまめかしい。ひらひらと舞い散る様は鶯ではないかと怪しむ(ほどだ)が、それでいて、その香はほのかに漂ってくる。その姿はあでやかで美しく、その風流な味わいは清らかでさっぱりしている。仮に風に吹かれて舞う雪、あるいは雪のように真っ白な柳の綿毛に喩えることができなくとも、どうして桜の花が春の景色をさらに賑やかにすることがないことがあるか、(いや疑いなく桜の花が春の景色を賑やかにしている)。江戸の人々が、つねづね桜の花を飛鳥山や隅田川に楽しむのは、その花の数が多いからである。その一方、相馬氏の藩邸内は小高い山や丘が重なり続き、周囲から抜きん出て高く盛り上がっている。その土地は澄みわたり、その風情は奥深く、(藩邸の内外を区切る)境界と桜の花の咲く範囲とがぴったり合っている。ここは麻布谷の第一の景勝地である。そうは言っても、飛鳥山や隅田川と見比べれば、(相馬氏の藩邸内の)桜の花の数はその半分すら眺めることができない。しかし、飛鳥山と隅田川は多くの観光客が入り乱れ、せっかくの風情をたいそう損なっている。この麻布谷の桜の花こそ奥深く澄みわたった土地のなかにあり、一点の塵にも汚されたところがない。かえって(麻布谷の桜の様子は)飛鳥山や隅田川より極めて優れること、はなはだしい。どうして麻布谷の第一の景勝地とするだけだよか(いや飛鳥山や隅田川にもまさる景勝地である)。